大阪天満宮社報　第49号

てんまてんじん

年首御慶

丙戌元旦

表紙解説
上田耕冲「天神画像」……2頁
アドプト・リバー認証式……3頁
「梅花祭」「梅まつり」……4頁
「講社連合会」三〇周年記念式典…6頁
「天満天神繁昌亭」安全祈願祭……8頁
生誕四〇〇年記念「西山宗因展」…10頁

表紙解説

「束帯天神像」

大阪天満宮所蔵　絹本着色
縦一四〇・二㎝　横八五・一㎝
上田耕冲筆　明治時代

松浦　清

束帯天神像は、朝廷の公の政務や儀式の際に着用する正服姿の天神画像に対して用いられる呼称で、この形式については、これまでも繰り返し、この場で紹介してきました。その姿は普通、垂纓の黒塗りの冠を被り、黒の縫腋の袍を纏い、下襲の裾を後方に折り曲げ、笏を手にして着座する姿で表現します。天神画像の装束について、しばしば「衣冠束帯」姿と呼ばれることがありますが、「衣冠」は「束帯」の略装であり、両者は着衣形式が異なる別物です。したがって一人の装束に「衣冠束帯」という形式が成立するわけではありません。

この束帯姿にも二種類の表現の違いがあります。それは平安時代末期までおこなわれた柔らかな生地を身に纏う形式と、鎌倉時代以降に主流となる糊の利いたこわばった生地で威儀を正した形式の二形式です。前者は萎装束、後者は強装束といわれます。表紙の天神画像は萎装束の例で、肩や袖の輪郭線がなだらかであることから、生地の柔らかさを感じ取ることができるでしょう。

この天神画像は、京都の北野天満宮に伝来する「根本御影」と呼ばれる天神画像（挿図）と図像的に共通する特徴が見受けられます。「根本御影」は北野天満宮で最も重視される天神画像です。鎌倉時代前期の画家で似絵の名手として知られる藤原信実が描いたとの伝承がありますが、実際には南北朝から室町時代にかけての制作とみられます。萎装束である点は古式を示す特徴といえるでしょう。畳縁を大臣が座る大紋高麗縁とするのも有職故実に忠実な表現といえます。

大阪天満宮の天神画像は幕末から明治にかけて活躍した大阪の画家、上田耕冲（一八一九―一九一一）が描いたものです。画面左下にある白文方印と朱文方印の陰影が、耕冲の作品であることを示しています。本図を納める木箱の蓋裏には制作の由来が記されています。それによれば、本図には巨勢公望が描いたという原本が存在し、その写しを用いて菅公一千年祭に描かれ、明治三十五年（一九〇二）三月、耕冲八十四歳の時に大阪天満宮に奉納されたことがわかります。巨勢公望は平安時代中期に活躍した巨勢派の画家ですが、残念ながら、現存作例は一点も確認できません。

巨勢公望が描いたという天神画像がどのようなものであったかは不明ですが、おそらく「根本御影」に近い図像であったと考えられます。北野天満宮には「根本御影」と瓜二つの別の天神画像があり、それには延暦寺南谷遺教院伝来との伝承があります。あるいは、それらに共通する原本が存在したのかもしれません。近年、この二点と図像的特徴が共通する第三の「根本御影類品」を実見しました。「根本御影」がいかに重視されていたかを窺うことができます。

菅公が大宰府で薨去された延喜三年（九〇三）から一千年、北野天満宮の「根本御影」あるいはその写しを参考に天神画像が制作されたことは十分考えられるでしょう。画面上部には「根本御影」と同様に色紙型が置かれており、そこには「去年今夜侍清涼／秋憶詩篇獨斷腸／恩賜御衣今在此／捧将毎日拝餘香」との漢詩が墨書されています。これは菅公が配流先の大宰府で詠まれた漢詩で、『菅家後集』に収載されています。

もっとも、本図には「根本御影」とは異なる表現も目に付きます。御簾や幔幕が描かれるのは神殿を意識した表現と見られ、神格化の強調といえるでしょう。顔貌が穏やかとなって、怒り天神としての面影が払拭されているのは、学問の神としての表現であるように思われます。

（大阪工業大学助教授）

束帯天神像（京都・北野天満宮）

『大阪アドプト・リバー・プログラム』に参加

このたび、大阪天満宮が「大阪アドプト・リバー・プログラム」参加団体として認証され、大阪府支援のもと、堂島川流域中、鉾流神事斎場を中心とした地域の、清掃や緑化につとめることになりました。

昨年十月十日、認証式典が催され、西大阪治水事務所より参加認定証の交付を受けました。その日は引き続き、第一回の清掃と緑化活動が行われ、当宮職員と天満天神御伽衆が参加しました。あいにくと小雨のぱらつく天気でしたが、清掃活動はとどこおりなく行われ、最後にプランターに花々を植え、斎場入り口に設置し、すがすがしい締めくくりとなりました

道路から川縁へ石段を降りて左の壁面には、昔の斎場の様子を撮影した写真や、鉾流神事などについての解説板も掲示しております。お近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄りいただき、川辺の景色を眺めながら憩いのひとときを過ごしごてみてはいかがでしょうか。

正式な認証内容は以下の通りです。
（認定標は制作中とのことです）

〈大阪アドプト・リバー・鉾流〉
団　体　大阪天満宮
河川名　一級河川堂島川
所　在　大阪市北区西天満一丁地先
　　堂島川（右岸）鉾流橋から
　　上流約30ｍの区間
範　囲　堤防敷、高水敷、堤内地

＊その後の活動
十月二十四日　第二回清掃
十一月一日　第三回清掃
十一月二十五日　第四回清掃

【アドプト・リバー・プログラムとは】

「アドプト・リバー・プログラム」の「アドプト（adopt）」とは、「養子にする」という意味です。

河川を「養子」、参加される団体を「里親」に見立てたこのプログラムは、河川管理者（各土木事務所など）、参加される地域の団体、および地元市町村の三者で、参加団体の美化活動の内容や、河川管理者・市町村の協力、分担内容などをさだめて協定を結ぶものです。これまで行政（実親）が一切を管理するのが当然と考えられてきた道路や川を、地域の皆さん（養親）に「養子」としてかわいがってもらおうということから「アドプト」と名づけられています。

大阪府では、この「アドプト・リバー・プログラム」を、平成十三年から、地元市の協力のもと、スタートしています。

初春の梅の行事

天神さまが、梅を愛でられたことは「東風吹かば」の歌とともによく知られています。

そこで、当宮の「梅」にちなんだ新春の風物詩をご紹介しましょう。正月二十五日の「梅花祭・初天神」と、二月十一日から一ヵ月開催する「てんま天神梅まつり」です。

梅花祭・初天神

正月二十四・二十五日

当宮では毎月二十五日には月次祭を斎行しています。御祭神・菅原道真公が太宰府にお遷りになったのが昌泰四年（九〇一）正月の二十五日、お亡くなりになったのが延喜三年（九〇三）二月二十五日、御誕生日も承和十二年（八四五）六月二十五日と伝えられ、御生涯の節目となった二十五日を天神さまの祭日としているからです。

なかでも、正月二十五日の「梅花祭」には、お供え物に梅の枝をさしそえて御神霊をお慰めする大切な祭儀が斎行されます。しかし、一般には一年最初の二十五日であることから「初天神」として、参拝者される方が多いようです。

そこで、毎年二十四日・二十五日の両日には「本殿通り抜け参拝」や、プロ野球選手等による「福玉まき」、そして参拝の皆さんに参加いただく「鷽替神事」が行われます。

鷽替神事の由来

「鷽替神事」とは、古くから、天神さまは学問の神様であるとともに、無実の罪をすすぐ「雪冤の神様」「正直の神様」としても信じられたことから、初天神の日に天神様の前で、過去一年間についた嘘を鷽鳥に託して、罪滅ぼしを祈願するものです。鷽鳥が天神様の愛木である梅に縁深い鳥であることに加えて、その名が「嘘」に通じることから生まれた行事のようです。また菅公が蜂に襲われたとき鷽の大群が助けたからという伝説もあります。

当日は境内に集まった参詣者が神職の打つ拝殿の大太鼓に合わせて、

替えましょう　替えましょう
嘘を真に替えましょう

と声を交わしながら、授かった「鷽鳥御守」をお互いに交換し、嘘の罪滅ぼしを天神様にお願いします。最後に手元に残った御守袋に、金製あるいは銀製の「鷽鳥」との引換券が入っていた参詣者は、その一年の幸運に恵まれると伝えられます。

第三回　てんま天神梅まつり

二月十一日～三月十二日

ご好評をいただいています「てん

ま天神梅まつり」は、今年も二月十一日（土）から三月十二日（日）までの一ヵ月にわたって開催することになりました。

一昨年に始まった「梅まつり」も今年で第三回を数えますが、職員で構成する委員会では、侃々諤々の議論を積み重ねて、皆様に喜んでいただけるよう様々な企画を練ってまいりました。

今年も、国の登録文化財である「参集殿」において、樹齢二百年を超える古梅の「盆梅展」を開催し、併せて、当宮所蔵の「天神画像」や、大阪府指定文化財「御迎人形」、梅の絵柄の「引札」なども展示致します。

また、期間中には、「神楽奉納」「神話朗読」「神道講談」「オープンカフェ」「土産物店」「骨董市」「古本市」「陶器市」「ガラス市」などを境内各所で繰り広げ、また「水墨画」「和裁・挿絵」などの教室も企画しています。もちろん好評の巫女手作りの「梅の木餅」や「振る舞い餅」もご用意しています。

一昨年・昨年は、様子も分からず、ご迷惑を多々おかけしたことと思いますが、今年で三回目ともなると、「なにぶん慣れないもので…」とは言い訳できないと、職員一同、気を入れて準備のための会議を重ねています。どうぞお楽しみに。

大阪天満宮献詠　風月社

平成十七年下半期秀歌

月山の頂上近し並び立つ
　ケルンにわれも石一つ積む
　　關俊一

峰高き空に向ひてさはやけく
　かへす谺も夏ふかみゆく
　　佐野秀子

六根清浄となふる白き一團の
　めざす御嶽神ゐます山
　　友岡美佐子

やはらかき靴をはかせし親心
　おそるおそるも歩む幼子
　　森本美也子

人の世は疎ましけれどいとほしく
　拙きわれの栖家なりけり
　　松村曉二

誰が撞く山辺の里に響く鐘
　心の底の邪念を責むる
　　松村龍太郎

小海線車窓に赤岳富士を愛で
　終着駅に甲斐駒そびゆ
　　永田民子

河童橋間近にせまる前穂高
　山ひだの雪すがしきらめく
　　太田たか子

生駒山ゆ風邪に乗り來るうぐひすの
　明るき聲に一日始まる
　　宝藏寺京子

天然の冷房効ける龍泉堂
　静寂（しじま）の中に碧水（うすみ）の湖
　　小嶺利子

父の靴はく幼な子は得意顔
　お舟お舟とよろこび歩む
　　岩城富子

魔法なる履けば歩める靴ひとつ
　ほしく思へり足萎え母に
　　鈴木敬子

月夜見の光に來ませ沓の鈴
　鳴らして舞へる乙女見るにも
　　牛田眞理子

富士登山競ひて進みし子供らは
　日本一の御來光待つ
　　塩小路光孚

掌のひらに拾ひ集めし榧の實は
　信貴山詣の夏の想ひ出
　　塩小路淳子

枕蚊帳に晝寢させむと團扇もて
　扇けば寢付く冷房なき世
　　入江千鶴

冷房で冷えし右肩庇ふ日々
　夕立降りて涼風待たる
　　中[illegible]央子

ふるさとの山懐に眠ります
　父母に詣でつうから連れだち
　　中山里江

標高は二千に近き山の尾根
　蝶の如くに黄連花しようま
　　三本さとる

短歌てふ頂上見えぬ山道を
　ただ黙々と今日も歩めり
　　西脇かつ

廢屋のさだめとなりてその日待つ
　家にのこれる亡き母の靴
　　畑下晴代

思ひ草集めて足らず取り出だす
　母が形見の南蛮煙管
　　廣[illegible]宗石

昨日夜叉今日は佛の心もつ
　はづかしながら我も人の子
　　淺井與四郎

大阪天満宮「講社連合会」発足
三〇周年記念式典

◆昭和五〇年九月に発会式

去る一一月二一日、当宮「講社連合会」の結成三〇周年の記念式典が行われました。

講社連合会が結成されたのは、第一次オイル・ショックの翌々年にあたる昭和五〇年のことでした。四八年の中東戦争が契機となったオイル・ショックの影響により、翌年の船渡御が中止されたのです。そこで、天神祭の安定的な運営を計ることを目的として、五〇年九月二四日の秋分の日、天満宮会館・孔雀の間に四六名の関係者が参集し、「大阪天満宮講社連合会」が結成されました。

この発会式では、会長に小林博、副会長に片山増太郎・長谷川清治、会計に福山善雄、庶務に水木友男、会計監事に尾形英治、幹事に岡崎清次郎・赤井伊之一・小林増次・中村善次・久井四十一・夏凪秀之助の各氏が役員として選任され、また顧問には寺井種茂・佐伯勇・前田治一郎、相談役に星見昊・中辻貴十郎・阪野慶一郎、中塚栄一の各氏が就任されました。

その後、会長は、二代目片山増太郎氏、三代目福山善雄氏、四代目橋本義夫氏を経て、現在は片山巌氏が五代会長を務められ、約三〇の講社の連合体としてご奉仕いただいています。

◆三〇周年記念式典

同日午後三時三〇分、三〇周年の記念に奉納された「唐櫃」の奉納奉告祭が本殿において斎行されました。来年から、鉾流神事にお供えする神饌を、この朱塗りの見事な「唐櫃」に納めますので、是非、ご覧ください。

奉告祭の後、「唐櫃」を前に集合写真を撮り、三〇年前に発足会の開かれたゆかりの「孔雀の間」に移り、四時一五分から記念式典が開かれました。片山会長のほか、寺井種伯宮司、勢山孝藏総代ら、御出席のもと、片山会長から寺井宮司に「奉納品目録」が贈呈されました。

その後、歓談に移ると、まるで天神祭の歴史を語る座談会のような雰囲気で、結成当時の懐かしい思い出話に花が咲きました。

唐櫃を前に記念撮影

講社連合会会員名簿

（十一月二十一日現在）

【顧　問】京極俊明・前田正・徳田育久子

【相談役】水木友男・松井満夫

【会　長】片山巌

【副会長】福山和幸・宗石剛

【会員講】太鼓中（島田学）・西天満連合神鉾講（石之秀雄）・地車講（永田勝彦）・御神酒講（鳥井親一）・天神講（福山和幸）・福梅講（宗石剛）・御旗講（出崎俊雄）・花傘講（前田正）・御羽車講（瓜生田為次）・丑日講（野村剛）・米穀商御錦蓋講（片山巌）・北信友の講（白井善康）・御鳳輦講（田中聰吉）・鳳講（小林俊行）・玉神輿講（高井昇）・松風講（栗原裕）・吉備講（池田謙三）・敬神婦人会・采女講（寺井紀美子）・大阪書林御文庫講（佐藤徹哉）・ドンドコ船講（夏凪一嘉）・菅公会（盛岡淑郎）・御船講（高林辰行）・供船講（橋本俊一）・大阪天満ライオンズクラブ奉仕講（永田秀夫）・榊講（寺井宏次）・梅風講（野田達朗）・燈明講（永田勉）・篝講（末澤正大）・人形船講（村上洋）

徳田育久子顧問
「旭日小綬章」を受章

講社連合会の顧問としてご尽力頂いております元大阪市議会議員の徳田育久子様が、平成一七年秋の生存者叙勲において、「旭日小綬章」を受章されました。長年のご功績に対する、栄えある受章を心からお祝い申し上げます。

「どんどこ講」写真集　発行

どんどこ船講の写真集『男達の熱い日々ーどんどこ船と共にー』が発行されます。約三〇ある講社のなかには、その誇るべき歴史を『講誌』としてまとめられている例も少なくありませんが、同書はそれらとは趣を異にし、全く解説もキャプションもない、写真だけの「写真集」です。

しかし、同講の活動を密着取材した何千枚もの写真のなかから厳選された、六〇余枚の写真が時系列に収められ、文字による解説が不要と感じられるほどに「熱い日々」が再現されています。

波を蹴立てて進むどんどこ船の勇姿、漕ぎ手の厳しい表情、激しい稽古の合間に見せる笑顔、恒例となっているおにぎりの差し入れ風景、などなど、思わずページを繰る手が止まります。

約一〇〇艘からなる船渡御の船団のうち、唯一の手漕ぎの船として、船列の順を無視して自由に航行する「どんどこ船」は、例年、マスコミやアマチュアカメラマンの格好の被写体となっていますが、この写真集によって、撮影意欲がかき立てられる人々も少なくないことでしょう。

ご希望の方は、社務所（米村・堀井・西野）までお尋ねください。

天満・天神繁昌亭安全祈願祭

鎮物之儀

建設予定地

上方落語協会の悲願であった落語定席「天満天神繁昌亭」の安全祈願祭が、去る一二月一日、境内北側の建設予定地で斎行されました。落語専門の小屋をつくり、協会の若手・中堅を育てて、上方落語の一層の発展を図りたいという、上方落語協会会長・桂三枝さんの夢がまた一歩実現に近づいたのです。

同日午前十時三十分、桂三枝会長をはじめ、桂福団治・月亭八方らの落語家さんや、浪曲の京山幸枝若さんら芸界から六〇名、地元からは一〇〇名が参列するなか、本殿において「安全祈願祭」が斎行され、続いて本殿北側の建設予定地に移って「清祓、地鎮行事」を執り行い、工事の無事を祈願しました。

その後、天満宮会館・孔雀の間で行われた「直会」では、初めに地車講の皆さんによる「地車囃子」で天神さんにできる落語小屋を祝いました。

芸人さん勢揃い

次いで、桂三枝会長が今日の喜びを話されました。

「繁昌亭は、先輩落語家の夢でした。落語という素晴らしい話芸の伝統を守るため、関西に一軒もなくなっていた落語定席が、こうして復活できることは嬉しくてなりません。」

また、寺井種伯宮司は、挨拶の中で、次のような提案をされました。

「平成十六年の一月に、上方落語協会の桂三枝会長が、天神橋筋商店連合会の土井年樹会長とともに来宮され、落語定席建設の協力を求められました。それから、まもなく二年を経て、今日の日を迎えたことを喜んでいます。しかし、建物の建築に目途がついたことにほっとするのではなく、これからは繁昌亭の運営をサポートする団体を組織すべきだと考えます。」

続いて出席者の歓談に移ると、繁

桂　三枝 会長

寺井 種伯 宮司

昌亭の繁昌だけではなく、それが地域の活性化に及ぼす効果についても熱く語られていたのが印象的でした。

明治後期には、七軒から八軒の寄席が営業していた当宮北側の「天満」は、「千日前」とともに、大阪の寄席芸の中心地でした。繁昌亭が、上方落語の隆盛をもたらすとともに、かつての天満の繁栄を呼び戻す起爆剤となることを期待する人も多いようです。

なお、「繁昌亭」は二階建ての建物に二三九席が設けられ、隣接する三階建ての事務棟には、楽屋や稽古場などが入る予定です。来年七月二五日の天神祭に合わせてプレ・オープンし、八月中旬には、いよいよ連日の寄席がスタートします。ご期待下さい。

浪速菅廟吟社詠草

雪稜　松村暁二　撰

七月課題「雨中聞鵑」

鐵枴　北口晶將

暮雨瀟瀟猶未晴　杜鵑啼過夜三更
枕頭殘燭明還滅　愁殺騒人夢後情

（訓読）暮雨瀟瀟として猶未だ晴れず杜鵑啼き過ぐ　夜三更　枕頭の残燭明また滅　愁殺す騒人　夢後の情

（語釈）杜鵑＝ホトトギス。三更＝真夜中、今の零時頃。残燭＝油の少なくなった灯火（古い時代の想定）。騒人＝詩人のこと。

（詩意）暮れ方の雨はしとしとと降って晴れてこず、ホトトギスが啼いてすぎ、目が覚めると真夜中になっていた。枕べの灯火が点いたり消えたりしている（心理描写）詩人の心は愁いにみちみちている。

八月課題「海濱避暑」

瀬風　長岡廣明

河口潮生與海連　魚飜波静月如弦
層樓倚檻涼風度　遠望漁舟水接天

（訓読）河口潮生じて海と連らなり魚飜び波静かにして月弦の如し　層楼の檻に倚れば涼風渡り　遠望すれば漁舟　水天に接す

（語釈）河口＝川が海や湖に流れこむところ。月如弦＝弓張り月のようだ。檻＝欄干と同じ平仄の関係でこの字となる。度＝渡るとおなじ（風がわたるというときなどに使う）。

（詩意）河口に潮が満ちて海と連なり、魚が飛び跳ね波静かで月は弓張り月のようである。海浜の高殿の手摺りにもたれていると涼風が吹き渡る、遙かにみわたせば漁舟が天に接しているようだ。

九月席題　分韻「江上散策」

得庚　豊穂　米田一男

江邊散策暮雲晴　坡下幽叢蟋蟀鳴
瞻仰笠峰明鏡耀　晁卿遺詠誘吟情

（訓読）江辺散策　暮雲晴れ　坡下の幽叢　蟋蟀鳴く　笠峰を瞻仰すれば明鏡耀き　晁卿の遺詠　吟情を誘う

（語釈）蟋蟀＝こおろぎ。笠峰＝三笠山。瞻望＝仰ぎ見る。晁卿＝阿倍仲麻呂の中国名。

（詩意）川縁を散策していると夕暮れの雲が晴れ、土手の草むらでは虫が鳴く三笠の山を仰ぎ見ると満月がかがやいている。阿倍仲麻呂の遺詠が私の吟情を誘うのである。

十一月席題　分韻「古都深秋」

得陽　秋鳳　樋口達彦

歳落西郊未印霜　古都山影動晨光
荻花楓葉皆秋色　時訪求詩五柳莊

（訓読）歳落ちて西郊　未だ霜を印せず古都の山影　晨光動く　荻花　楓葉皆秋色　時に訪ねて詩を求めん　五柳莊

（語釈）歳落＝年が草木の落ちる季節になったこと。つまり秋。李白「大原草木」に（歳落衆芳歇）。五柳莊＝五柳先生（陶淵明）の庵。

（詩意）草木が葉を落とす秋の郊外はまだ霜が降らない、古都の山影は朝の光りに動くようだ。荻の花も楓の葉もすべてが秋の彩りをみせている、ときに五柳先生を訪ねて詩を求めてみたいものだ。

柿衛文庫　特別展覧会
西山宗因生誕四百年記念　宗因から芭蕉へ
当宮所蔵西山宗因自筆本などを出品

平成十七年十月二十二日(土)から十二月四日まで、伊丹の柿衛文庫において、特別展覧会「宗因から芭蕉へ」が開催されました。平成十七年(二〇〇五)は、西山宗因の生誕四百年に当たっており、(財)柿衛文庫と八代市立博物館(熊本県八代市・平成十八年四月開催予定)と(財)日本書道美術館(東京都板橋区・平成十九年一月開催予定)の共同企画により開催されたものです。

大阪天満宮「連歌所懸額」と「境内図」

この特別展には、宗因遺墨の優品が新出資料や初公開資料を含めて展観され、宗因の影響を強く受けた芭蕉の名品も合わせて鑑賞できるように展示されていました。

当宮から出品し展観されたものは次のとおりです。

一　宗因筆『昌琢発句帳』
二　宗因筆『宗因発句帳』
三　宗因筆『十花千句』
四　宗因筆『桜御所千句』
五　宗因筆『風庵懐旧千句』
六　宗因筆『豊前小倉千句』
七　『万句発句帳』
八　宗珍筆『什物目録』
九　『連歌書籍目録』
十　宗春筆『正方・宗因両吟千句』
十一　渡唐天神図
十二　連歌所懸額
十三　大阪天満宮境内図

西山宗因筆『宗因発句帳』

沖縄万葉友の会のみなさん
扁額「徳 馨」の故地を訪ねて来宮

平成十七年十一月九日(水)、沖縄万葉友の会の皆さんは摂津・和泉万葉楽修旅行の途次、沖縄県立博物館に掲げられている扁額「徳馨」の故郷である当宮を訪ねて来られました。

「徳馨」の額は天保十四年(一八四三)に琉球国摂政尚元魯(浦添王子)が当宮へ奉納したものです。浦添王子は琉球国正使として江戸にのぼり、十二代将軍徳川家慶に謁見しました。

本殿東側昇殿口に懸けられていた
琉球国浦添王子奉納の
扁額「徳 馨」

この浦添王子揮毫の扁額は、本殿東側昇殿口に懸けられていましたが、寺井種茂宮司が沖縄を訪れた際、戦災で幾多の貴重な文化財が失われたことを憂い、沖縄へ贈ることを決断し、昭和四十九年十一月二十二日に沖縄県立博物館への寄贈式典が本殿で斎行されました。こうして、「徳馨」の額は当宮へ奉納されてより百三十一年目に沖縄へ旅立ったのです。

今回、沖縄万葉友の会の方々に説明したのは、糸数智子権禰宜、糸数昌史権禰宜姉弟です。糸数家は沖縄那覇市がふるさとで、しばし沖縄と当宮の不思議な縁の話に花が咲きました。(社報「てんまてんじん」第四号・第六号参照)

沖縄の皆さんに説明する
糸数智子権禰宜と糸数昌史権禰宜

第三期「天満天神御伽衆」任命

「天神祭」や「てんま天神梅まつり」など、当宮年中行事にボランティア・ガイドとして御奉仕いただいている「天満天神御伽衆」の第三期生が、去る十月九日に任命されました。

第三期の御伽衆を養成するための「天満天神御伽塾」は、四月から六月にかけて計一〇講座が開講され、約三〇名の受講生は、「菅原道真公の御生涯」「天神信仰の変遷」「大阪天満宮の歴史」「天神祭の歴史」などについて学びました。その後、天神祭での実習を経て、最終的には計六名が任命されたものです。

これによって、第一・二期生と合わせて御伽衆は、二十六名となりました。平成十三年から活動を始めましたから、すでに五年を経過しました。お陰さまで、天神祭当日には、渡御船での解説だけではなく、各種の催し物やマスコミ取材に引っ張りだこの嬉しい悲鳴をあげています。

第三期生は、本年の「てんま天神梅まつり」でデビューすることになります。

第二〇回　天満天神研究会

去る十二月十一日、当宮文華館三階で第二〇回「天満天神研究会」が行われました。同会は、大阪近辺の大学教員や美術館・博物館の学芸員などによる天神信仰の研究会として平成一〇年に始まりましたが、第一五回からは「太子信仰と天神信仰の比較史的研究会」との合同開催となっています。

今回は大阪大学大学院の藤田穣助教授が「聖徳太子像の成立―彫刻史の視点から―」について発表、その後、境内に出て、当宮文化研究所の高島研究員が、境内を巡りながら、成立期天神信仰の痕跡について解説しました。

ジェシー・マッカートニー来宮

アメリカの人気ヴォーカリスト、ジェシー・マッカートニーがヒット祈願のために来宮し、本殿で評判の歌声を披露しました。

ジェシーは、一〇月二日～八日の初来日に先だって、九月二八日に来日記念CD『ビューティフル・ソウル＋アップ・クローズ』をリリースしています。そこで、去る一〇月四日、この二枚組CDのヒットを祈願するため当宮に参拝したものです。

青山神饌田の新耕作長に西山孝司さん就任

三重県伊賀市（旧、青山町）の当宮「神饌田」をお世話いただく耕作長が、これまでの岡本正直様に代わり、西山孝司様が就任されました（五月一二日付）。

神饌田では、毎年五月に宮司以下神職・巫女による「御田植祭」を執り行い、その収穫米は、秋の新嘗祭に奉納され、朝御饌・夕御饌にお供えし、また当宮で初宮詣されたお子様の満一歳の誕生日に、「大阪天満宮御撤米」としてお贈りしています。

帰幽

石船　健様
平成一七年一一月五日
享年七十七歳

平成六年にオーストラリア・ブリスベンで行われた天神祭を記念して、ブリスベン河畔・サウスバンク公園に「日豪親善の碑」を建碑されるなど、当宮の熱心な崇敬者としてご尽力いただきました。

勇壮に厳かに　流鏑馬神事

去る十月二十五日、恒例の「流鏑馬神事」（正しくは「流鏑馬式」）が行われ、沿道の人々からは、騎馬武者が的を叩き割るたびに大きな拍手が巻き起こりました。

午前には本殿において「秋大祭」が斎行され、午後三時からは流鏑馬式が行われました。醴（あまざけ）などの神饌が供えられ、宮司の祝詞奏上に続いて、騎乗の神職が、本殿前に設けられた高殿の周りを三巡した後、表門から南の折返し地点までの馬場を祓い清め（馬場清祓の儀）、次に、麻裃に陣笠を着た前駆者が騎乗して、高殿の下を三巡の後、速歩で折返し地点までを往復しました（馬場試乗の儀）。

次に本殿階下において室町時代の狩装束を着た本駆者が、弓に鏑矢をつがえ、四方の天を射る「弓祈祷」を執行。次に「騎射の儀」では、本駆者が高殿の下を三巡後、馬を馳せて折返し地点までを三往復し、三ヵ所の的を半弓で打ち破ります。

流鏑馬は平安時代に始まり、鎌倉時代には武術の鍛錬のために盛行しましたが、室町時代以降は、神事の際に奉納されるように変化しました。

当宮の流鏑馬の起源については分かりませんが、少なくとも戦国時代には行われていた記録があります。その後、江戸時代初期の『難波鑑』には、疾走する馬上から的を矢で射る様子が記録されていますが、江戸後期の『蘆の若葉』には、馬上から半弓で的を打ち破る、現在の形式に描かれています。

表門筋の発展に伴い、人々の安全を優先して、現在の当宮独特の形式が生み出されたようです。

編集後記

◆初天神の「鷽替神事」の予告記事を書きながら、昨今の「嘘」の多い世相を思い浮かべ、真っ先に初天神にお参りすべきは：、などと考えてしまいました。

◆今年の天神祭に、「天満天神繁昌亭」はプレ・オープンすることになりました。「地域あっての天満宮、天満宮あっての地域」という寺井宮司の変わらぬ信念に、三枝会長が応えて、地域を優先した判断をされたようです。

かつて、寄席小屋が軒を連ね「天満八軒」と言われた「天満」の賑わいが、今一度、再現されることを期待しましょう。

大阪天満宮社報
てんまてんじん 第49号
平成17年12月25日印刷
平成18年1月1日発行
発行人　寺井種伯
発行所　大阪天満宮社務所
〒530-0041　大阪市北区天神橋2-1-8
TEL　06-6353-0025
印刷所　木村印刷株式会社